

我

御咄しの趣、一々御尤に付き、企救郡だけは暫く御預け申し候、よろしく御取計らい下さるべく候

丸山家文書（豊津町歴史民俗資料館蔵）

こうして、交渉の次第は長州の小田村素太郎・廣澤兵助と小倉藩士生駒主税らの再会談において、毛利藩主・重役らの了承を得たうえで、「覚書」が示され、企救郡一円を長州藩が占領することになった。

正月二十三日、幕府は「国喪」につき征長解兵令を出した。そして二月二十一日、田川郡今任村在陣中の小笠原幸松丸（安志藩主）らは解兵令に基づき陣払いをして安志へ引き取った。

四 香春藩の成立

藩庁の設置と 慶応二年（一八六六）十月朔日、採銅所町の改革 政治 仮政府を香春町に移した。同地の御茶屋を藩庁として、藩士たちに以前のように城内で行っていた政務を担当するように触れ出された。慶応三年（一八六七）三月中旬には、熊本に避難していた家臣の帰還（藩主一族側近はそのまま滞留）、四月には日田駐屯の兵も香春に帰ってきたので、ますます困窮度を加えた。

また、前年の十二月から肥後藩での避難民について、前述の『木下助之日記（二）』には次のように記している。「小倉藩之

家族本国二引取、長州より度々小倉江和議之相談ニかかり、城下企救郡一郡之外者決而構」わずとの和議が成立したので四月中旬に急ぎ帰国することになった。この間、避難民の賄い（世話）について二月までは肥後藩から出費し、三月からは小倉藩が出費した。帰国する避難民は、小倉藩領の農家に割り当て自炊するとなっている。つまり、肥後藩も小倉藩も相当な大がかりな費用を要したことが分かる。

こうした中で、藩制の整備が実行された。三月十八日、香春お茶屋に仮政府を設置し、家臣の居住も定めて香春藩が発足した。そして、四月には征長戦の指導者であった小宮民部がその責を問われ、隠居・謹慎が命じられた。かわって、改革のため人事異動が頻繁に行われ、身分の低い者でも能力があれば登用される道が開かれた。

文武の奨励も行うべく、藩校思永館の再興も香春の光願寺に文武館を置いて同年の五月に開館した。家臣の分散移住もあって、支館も確保された（本庄村信福寺・田原村連側寺・上赤村正福寺・節丸村阿弥陀寺・別府村法蓮寺に置かれた）。

六月には継嗣の豊千代丸が、十代藩主小笠原忠忱として就任したが、幼少のため後見役として新田藩主の小笠原貞正が藩政を統括することになった。このように、小倉藩は藩体制の再建に取り組んでいた。

慶応三年十月、小倉藩（香春藩）は、大政奉還後に朝廷から

の参集命令を断り、藩政優先の方針のもとに家老の島村志津摩を中心として改革政治が遂行された。小倉藩にとつては、幕長戦後の混乱から藩体制を再建することが最も優先された。島村は制産掛・制産方を設けて、藩内ですべての物を製造するように指示した。また、藩士の中から有能な人物の抜擢を行うなどを試みた。すでに八月、香春町勾金の鶴岡八幡の境内に門田栄銃隊による訓練場が設けられ、新式の銃隊訓練に力を入れるようになった。十月には、大庄屋をはじめ村役人についても百姓の投票で決める方針を布達し、十二月には家臣に対して、藩政についての意見を申し出るように触れ、同時にそれらの意見を検討するための衆議所の設置をした。

こうしたなかで、鳥羽・伏見の戦いの出兵の命令が出た。これに応じるために必要な財源を確保しなければならなかった。このために藩政の機構改革に乗り出した。今までの郡代・代官・山奉行・検見定役・郡土蔵・作事方・井樋方・炭役・蓑島在番・大橋町茶屋番その役を廃止し、かわりに郡方役所・町方役所・作事方役所・商法方役所・元方役所など、大幅な機構改革を実施した。

藩主小笠原忠忱一行が三月十二日肥後から帰ってきた。宿舎は田川郡上赤村の正福寺がであてられた。また、奥州に出兵していた藩兵たちも春の内に帰藩し、家臣たちには、四月十八日「土着」が命じられた。すなわち農業にも従事するようにさせ

られたわけである。そして、知行通・書院番以上の格の者は田川・京都・仲津の三郡に住み、組外通・組拔きの者は仲津・築城の両郡に住むように達しが出た(『田川市史』上巻 七八五～七九〇頁)。

第三節 戊辰戦争と東北出兵

一 戊辰戦争

鳥羽・伏見の戦い

慶応三年(一八六七)十月十四日、十五代将軍徳川慶喜から朝廷に大政奉還がなされた。同日、朝廷から薩摩・長州両藩に「討幕の密勅」が出されていた。この日から十二月九日の王政復古の大号令までは、次の時代の政権をめぐる息詰まる月日であった。その結果生まれた新政府は、有栖川宮熾仁親王を総裁とした議定・参与からなる三職によって構成された。この政府の最初の大きな課題は、なお多くの領地と軍事力をもっている徳川慶喜を政権から排除し、その地位と領地を取り上げることであった(辞官・納地という)。また、十月には諸藩に対し、十一月中旬に上京するよう命じたが、参集ははかばかしくなかった。政権の帰趨はどちらともいえない不安定な新政府であった。

こういった状況を大きく変えたのが、明治元年(一八六八)